

はじめに

「ギフティッド」。耳慣れない言葉と思う方もいらっしゃるかと思います。聞いたことがあるけれど、自分とは別世界の天才のこと、あるいは、ああ、発達障害のことね、と思う方もおられるかもしれません。実は、そうではないのです、というのがこの本の趣旨の一つです。並外れた才能はあるけれども天才とは限らない（天才ではない人のほうが断然多い）、必ずしも発達障害を伴うとは限らない（別の次元のカテゴリーである）、2E（twice-exceptional：発達障害を伴うギフティッド児など。二重の意味で定型あるいは標準ではないことからくる）であつても、障害と才能が相互に隠し合うという点でサヴァン症候群（知的障害や自閉スペクトラム症等のある人々の中で、計算や音楽など特定の限られた分野で非常に突出した才能を発揮する人）とは異なる。そんな特徴に注目しつつ、ギフティッドの、特にギフティッドの子どもたちの理解をとにも深めることができますと思います。

あるお母様の手記

ギフティッド児の支援についてあれこれ思いめぐらしている時に目にとまった新聞記事があります。2020年5月27日の「毎日新聞」のネット記事^{*1}です。見出しには、「『わがまま、怠けていると誤解された』息子の障害 命がけの訴えを手記に」とありました。それは17歳5か月で自死した青年のお母様がかかれた手記に関する記事でした。ギフティッドは障害ではないのですが、なぜこの記事に目がとまったのかというと、ギフティッド児が受けやすい誤診の問題が私の頭にあつたからです。ちょうどこの記事が出される少し前、2019年の9月に邦訳書『ギフティッド その誤診と重複診断―心理・医療・教育の現場から』^{*2}を上梓したところでした。記事を読んだ瞬間、「この子にはあの本が間に合わなかった!」と、涙がこぼれ出しました。新聞記事の文面から垣間^{かいま}見える母親の描く青年の様子が、翻訳した本に出てくる誤診されるギフティッド児と重なる部分が多いと感じたのです。このお母様は、息子さんの自死を発達障害という観点から理解しようと一生懸命でした。しかし、どうしてもわからないという苦しみも感じていらっしゃいました。

手記そのものは、このお母様が「2020 長野の子ども白書」に書いたものです。この白書は、長野県の教育の実態や課題について、いろいろな立場からの思いや意見が綴られ、毎年春〜夏頃に刊行されます。早速その白書を取り寄せ、手記全文を読みました。以下は、手記の中から特に私の心にギフトの文字が浮かんだ部分を引用したものです。^{*3}

「幼児期、次男はじっとしていることができず、育て方が悪い、躾が悪いと周りから言われ、私は謝ってばかりいました。(中略)

小学校へ入学すると、(中略) 耳からの情報や曖昧な指示が苦手、不注意で忘れ物、なくし物が多いので、担任から家に苦情がきたり、『先生に倉庫に閉じ込められて怖かった』という日もありました。(中略) 特別支援クラスへとお願ひしても『成績は優秀だから必要ない、愛情不足。毎晩絵本を読んであげて』と言われ、私はますます自信をなくしていききました」

「小4〜6年まで(中略) 息子は周りの空気が読めず、遊んでいると不意にみんなから注意されるようなことがあってもわけがわからず、とても困っていました。担任に伝えても、

見た目が普通で勉強はできる息子の態度がわがまま、怠けと誤解されていたと思います。また先生の叱責すべてが自分の事だと感じて、恐怖からいつも緊張して目の下にクマを作り体にヘルペスができても頑張つて登校していました」

「医療機関を受診すると、当時聞き慣れない『発達障害』と診断されました。(中略) 息子は突然フラッシュバックに襲われ、何かにおびえるように頭を抱えました。(中略) フリースクール(では)(中略)ありのままの息子を認めてくれる愛情深い先生方や仲間が待つていて、(中略) 息子は皆を笑わせて盛り上げ、小さい後輩たちからも慕われて楽しんでいました」

「教室の先生は『息子がみんなを盛り上げて元気にしている。年下の子どもたちが慕って待つている』と、必要としてくださいました」

「息子は傷つきながらも『学校に行きたい。友だちに会いたい』『でも先生には会いたくない』と言いました」

「6年生の時に授業で書いた作文の終わりには『一瞬でたくさん命を奪った原爆はもう二度と使つてはいけなと思います。昔、戦争でたくさんの方が死んでしまいました。』

でもその人たちに比べて僕らは自分のやりたいことができる。たくさんの死んだ人のためにも、どんなに辛いことや大変なことがあっても、がんばって生きていこうと思いました』と書いていました。(中略)

中学へ入学し、(中略) 2年になるとクラスでは問題が多く、正義感の強い息子は担任がひどいいじめを解決せず親にも隠蔽したと激怒し、友人をかばってトラブルを起こしたり、仲間と一緒に担任に反抗するようになりました。このことでたびたび私は学校に呼ばれて謝りましたが、友だちを守ろうとする正義感の強い息子を誇りに思っていました」

「息子は真面目でしたが何度も教師に人格を否定されることに傷つき、そのたびに自暴自棄になり勉強も投げ出しました。

(中略) 高校入学後(中略) 身体能力が高い息子は、初めてやる運動種目なのに、エース選手になり、後輩に慕われているからと不本意にもキャプテンになり、とても重圧を感じていました」(カッコ内は著者による)

そして、お母様はこの手記を書かれた時点で、確信をもって次のように記しています。

「息子はいつも人を助け、励まし、笑わせて皆を幸せにし皆に愛されていました。頭の回転が早く、多趣味、手先が器用で折り紙が得意。穏やかで平和主義、純粹でまったく差別や偏見がなく、自分より人を大切に思う思いやりの深い子でした」

まるで、このお母様は、ギフトイッドのことをよくご存じのようだとさえ思いました。このお母様の確信は、息子さん自身が記したもので十分裏づけられています。遺書には、「勘違いしないでほしいのは、別にだれかのせいでもうなったとか、ではなく単純に未来に希望が持てなくなっただけ」と記されていたということです。また、息子さんがまだ9歳だった時の作文も最後に載せられていました。

「おなかの中にいるとき元気になるようにあつい夏もがまんして歩いてくれてありがとう。あいじょうをもらったことにとでもかんしゃしています。小さい時、まいにち兎どうかんや公園へつれていって来てくれてありがとう。赤ちゃんの時から毎ばん絵本を読んでくれてあ

りがとう。だから本が大好きになったんだね。ここまでそだててくれて、ほくをうんでくれてありがとう。これから楽しい思い出を作るよ。〈9才のほくより〉

今でもこの手記を読むと涙がこぼれるのですが、最初に読んだ時のショックはとてもしなものでした。居ても立ってもいられず、翻訳したての本を「長野の子ども白書」事務局を通じて届けていただきました。

その後、お母様から驚きと感動にあふれた手紙が届きました。この本はまるで息子のことが書かれているようだという内容のお手紙でした。そして、手記を新聞記事にされた記者の取り計らいで、お母様と対談することができました。その後^{*}にどのような展開があったのか、詳細は「ギフトッド応援隊」のホームページをご覧ください（「ギフトッド応援隊」は、わが子がギフトッドあるいは2Eかもしれないと感じている、または検査結果を見てそのように確信したという保護者の自助グループです）。

対談の際、お母様と記者から「この子（息子さん）はギフトッドだったのでしょうか？」と質問を受けましたが、これには正直困りました。私は「わからない」と返答する

他ありませんでした。「ただ、ギフティッドに当てはまる特性が多すぎると思う」とお伝えすることはできましたが、それ以上のことは何も言えませんでした。なぜか。それは、「ギフティッド児とはどのような子どもを指すか」について世界でおよそ共通理解されている点は、「並外れた才能が潜在的にでもあるかどうか」の一点だからです。私が手記から感じとった、正義感や共感性の強さ、エネルギーシユさ、一見発達障害と見間違えるような言動や態度といった社会情緒的特性（性格や社会性、情緒など、認知的な特性以外の特性）は、ギフティッド児かどうかの判断基準にはなり得ないのです。

私の心に「ギフティッド」という言葉がよぎったのは、もちろん、この手記に「本が大きい」や「成績は優秀」「頭の回転が速い」「身体能力が高い」という「才能」の部分も併せて記されていたということもあります。ただ、それが「並外れている」かどうかは、まったくわかりませんでした。よくいる「優秀な子」という範囲にあるだけかもしれません。それでも私の心に「ギフティッド」ではないか、という思いがよぎったのは、それらの「優秀な子」とも言える特徴とともに、前述のような社会情緒的特性が併記されていたからです。これらの社会情緒的特性は、ギフティッドの定義とは位置づけられていませんの

で、すべてのギフティッド児に当てはまるわけではありません。しかし、ギフティッド児の多くに見られる特性として位置づけられていることは確かです。

ギフティッド児はその秘めた才能を幼少期から十分発揮しているかという点、まだ子どもであるがゆえにそうではないことがほとんどです。ですので、その才能が、並外れているかどうかは、表面上発揮されている才能の程度では判断できません。そのため、子どもの場合は特に、「知的な聡明さとともにこのような社会情緒的特性がギフティッド児の多くに見られる」という理解が非常に重要になります。

知的優秀さと社会情緒的特性からギフティッドの可能性に目を向ける意味

知的優秀さはギフティッド児の顕著な特性の一つです。特に「本が大すき」とあえて言いきれるほどの本好きは、ごく幼少期から見られるギフティッド児の高い知性の一つと考えられています。^{*5} このようなギフティッド児の特性を少しでも知っていると、知的優秀さとともに前述のような社会情緒的特性をもつ子どもに対して、「この子はギフティッドかもしれない」という眼差し^{まなび}を向けることができます。

ギフティッドかどうかをはっきりさせるためには、何らかの検査や才能の根拠が必要で
す。たとえば知能検査は特に知的な才能の秀でた「知的ギフティッド」であるかどうかを
判断するための有力な材料の一つです。ところが、ギフティッドの可能性が頭をよぎった
時、知能検査をはじめ、何らかの客観的な判断材料となる情報を得るのはそう簡単ではな
いの、今の日本の現状です。ただ、ギフティッド児に見られるとされる社会情緒的特性
が多く当てはまる時、ギフティッドかどうかははっきりしない段階であっても、その子を理
解するうえで「障害」とか「風変わり」という枠組みだけでなく「ギフティッド」という
枠組みも取り入れ、その子を理解したり教育環境を見直したりしようとすることは、実際
問題として非常に大切で有意義なプロセスとなります。

お母様との対談の後、息子さんが小学4年生の時に受けていたWISC^{ウイスク}（ウェクスラー児
童用知能検査：現在世界でもっとも広く使われている個別式知能検査）のFSIQ（Full Scale
IQ：全検査IQ。いわゆる知能指数（IQ）に相当するもの。全般的な知的能力の高さを示す）が
124だったことがわかりました。これは、「マイルドリー・ギフティッド」のカテゴリ
ーに入ります。私が対談で「お聞きしたお話からだけでは、ギフティッドに当てはまる特

性が多すぎるとは言えるけれども、ギフトテッドかどうかについては、「判断できない」と申し上げたところ、お母様が思い出の詰まったいろいろな物をひっくり返して知能検査結果を探し出してくださったのです。

F S I Qによりギフトテッドをいくつかのカテゴリーに分けることがあります。目安として、115～129がマイルドリー、130～144がモデレイトリー、145～159がハイリー、160～179がエクセプシヨナリー、180～がプロファウンドリー・ギフトテッドとされます。^{*6} このカテゴリーは、知的レベルの優劣を示すと解釈すべきではなく、同じ「ギフトテッド」の中に、非常に多様な子どもが含まれると理解する必要があります。たとえばマイルドリーとプロファウンドリーとの間のF S I Qの差は65以上になることがあり、これは、F S I Q 70と130との間の差以上の質の違いがあることがわかります。

ギフトテッドの可能性に気づく入り口は「才能」ではなく「困難」や「違和感」

このお母様の手記に始まる一連の経緯が「ギフトテッド応援隊」のホームページに掲載さ

れると、非常に多くのギフティッド児（あるいはギフティッドかもしれない子ども）を育てている保護者の方からの共感が寄せられたそうです。この共感は何に対する共感なのでしょう。それは「ギフティッド児とはどのような子どもを指すか」に直結する、知的に優秀であったり運動能力が優れていたり、何でもたやすく習得できるという特性への共感ではありません。もちろんそれらも組み合わせるうえでの話ではありますが、共感の向けられる先はむしろ、生きにくさ、育てにくさ、学校をはじめとする社会からの理解の得られにくさなのです。

ギフティッド児を育てる保護者の悩みは普段の生活ではなかなか共感を得られない、というのが現状です。乳児期から見られる感覚過敏や傷つきやすさをはじめとする繊細さ、エネルギーが有り余っていてどうにも多動としか思えない、興味の対象が他の子と違ううえに、その強烈な興味関心のもち方は「こだわりがある」と言われると否定できない、なんとなく孤立している……、そのようなことが、ギフティッド児を育てる親の頭には常に引っかかっています。しかし、これらの心配事に共感してもらえないことは減多にありません。むしろ、周囲からは「そんなこともできるの？ すごいわねー」と言われるばかりな

のです。一方、この「すごい」という言葉は、当の親の耳にはあまり残りません。ごくごくありふれた、子ども同士を認め受け入れ合う温かな言葉に感じることが多いのです。特に第一子の場合は、わが子の優れたところに関しては「普通、そんなものだろう」という感覚が生まれやすく、それがあまり特別だとは思えなかったり、ほとんど気にとまらなかつたりします。むしろ、育てにくいところ、「なんだか他の子と違う」ところにばかり目が向き、改めて周囲の子どもを見ると、やはりわが子は何か違うという確信を徐々に強めていきます。

それでも小学校入学前は、幼稚園や保育所のゆったりとした時間配分であったり、子どもの興味関心に基づいた保育に力を入れている園だったりすると、そのような環境のもとで、表向きは大きな問題もなく過ごせたりもします（もちろん、この時点で大きな壁に直面する子もいます）。表向き大きな問題がなくても、親の目には「他の子と違う」点が見えてしまいます。「上履きを嫌がる」「保育園では緊張していて家での様子とまったく違う」など敏感さや繊細さが目につき、他の保護者に聞くと、自分の子は特に嫌がってはいないとか、家と園での様子は大きく変わらぬなどの返事が返ってきて、ますます「違う」ことがは

つきりしてしまうような状況に追いやられます。さらには、「お友だちと遊ばないで絵本ばかり読んでいる」「お人形で遊ばないで、時計ばかりいじっている」なども親にとつては非常に心配な様子に映るのですが、それを他の保護者に話すと、「え？　もう絵本を自分で読めるの？　時計を読めるの？　すごい。うちなんか、ぜんぜん。そんなことできないからお人形で遊んでるのかも」といった返事が返ってくるわけです。このようなことが度重なると、「なんだか自慢しているような空気になるから、ママ友への相談はやめておこう」となり、保護者同士の他愛もない会話で「うちも！　うちも！」と盛り上がることもできず、非常に孤独な中での子育てとなっていきます。

そうこうしているうちに小学校入学となり、多くの場合、ここで大きな壁に直面します。今はスタートアップ・カリキュラムなどで、1年生が学校生活にスムーズに慣れていけるような工夫がなされるので、壁に遭遇する時期はいろいろですが、本格的な教科学習が始まると間もなく、その壁が現れます。「授業中、先生の話を聞けない」「授業中、席に座っていない」「宿題をやつてこない」「ルールに従えない」「お友だちと協力できない」。そして、「学校に行きたがらない」……。先生が何回注意しても直らない、ますますひど

くなるような時、あるいは、保護者や先生が工夫しても学校へ行けないという事態が生じた時、おそらく周囲の大人は「障害児ではないか？」と心配し始めます。そのため「一度お医者さんに診てもらおうように」「検査を受けるように」と学校から勧められたり、そうでなくても保護者が限界を感じて検査を希望し、種々の検査の一つとして知能検査を受けるということになります。その時初めて、親はわが子の知能が非常に高い（FSIQ130以上）という結果を突きつけられます。ところが、これまでの日本では多くの場合、FSIQが130以上の時は、「知能には問題がありません」と言われるだけでした。個々の指標得点間の開きが大きすぎることを指摘されることはあるかもしれませんが（知能検査結果として得られるのは、総合的な知能であるFSIQだけでなく、たとえばWISC-Vでは、言語理解、視空間、流動性推理、ワーキングメモリ、処理速度といった、知的能力の種類別の得点が指標得点として算出されます）。知能が非常に高いという結果に保護者はいろいろな意味でショックを受け、そのことについて調べ始めます。わけがわからないままにインターネットで調べていると、「ギフトティッド」というなんだか聞きなれない言葉に出会い、まるでわが子がそこに描かれているかのように感じられる特性が記されていることを知ります。そ

して、これまでのわが子をめぐるあらゆる気がかりが、実はこの知能の高さと無関係ではなかったとわかり、点と点が一瞬にして線でつながる感覚を経験します。そして、その時からギフトティッド児の保護者として、その理解と支援を学校や社会、医療の現場に求め始めます。

このように、「ギフトティッド」という概念に出会う入り口は実は才能ではなく、親としての困難や引っかけかり、違和感であることが少なくありません。

すべてのギフトティッド児が深刻な困難を経験するわけではない

ただし、すべてのギフトティッド児の親が気がかりや困難を感じているのかというと、そうではありません。「どのような子であつても子育ては大変だよね」という範囲での苦労や困難はもちろんです。が、「何か、おかしい」と悩むことまではなく、幼稚園、小学校に上がり、そして、中学、高校へと進んでいくギフトティッド児もいます。たとえば、幼少の頃から性格が穏やかで度量が大きいギフトティッド児もいます。このようなギフトティッド児はその穏やかさに支えられ、学校生活で過度に深刻なトラブルを経験することなく、

さまざまな場面で活躍し、成長していきます。また、ギフトテイッド児本人は決して穏やかとは言えない性格であっても、学校が非常にフレキシブルで、先生も友だちも互いのよさを認め合い受容的である時、その環境に支えられて生き生きと成長していくこともありま
す。そのような子ども、またその保護者は、困難の原因を探るための検査を必要とするこ
とがないため、ギフトテイッドかどうかを判断できるような検査を受けることは、今日の日
本では、まずないでしょう。もつと言えば、死ぬまで自分がギフトテイッドであるかどう
かなど知ることはないでしょうし、周囲が知る術すべもないということになります。実際、小・
中・高校時代、ノートを取ったこともないのに東大に楽々合格するような頭脳を持ち主で、
級友から慕われ頼りにされ、成人後もとある分野をけん引するような立場にあり、「次は
ノーベル賞だね」と周囲で噂うわさされているという方もいらっしゃいます。ただ、何らかの検
査をして「ギフトテイッド」だと判定されているわけではないので、「今思えばギフトテイッ
ド児だったのだろうね」「きつとギフトテイッドなのだろうね」という想定での話となるの
です。

ギフテッドかどうかの判定が必要なのは子どもが困難を経験している時

日本の場合、才能は非常に秀でていても困難がない場合、その子がギフテッドかどうかを何らかの基準に照らし合わせて判断する機会はありません（ギフテッド教育制度がある国では、ギフテッド児のための学校やクラスへの所属の可否を決めるために、才能がある子は困難がなくてもギフテッド判定のための一連の検査や評価を受けるのが一般的です）。

ギフテッドの判定は、子どものニーズと教育との間にギャップが生じている際に必要となるという見解があります^{*7}。この見解を今の日本に当てはめると、子どもにとって大きな困難がなければ、ギフテッドかどうかを知る術もその必要性を感じる機会もないという現状でよい、いや、それがよいということになるでしょう。ギフテッドかどうかは並外れた才能や素質の有無が判断基準となりますが、並外れた才能のある子が今身を置く環境で元気に生き生きと力を発揮できているのであれば、ギフテッドであるかないかなど考える必要はありませんし、ギフテッドであることが明確になったからといって何か事態を大きく改善しなければならぬわけでもありません。その基準の適用とギフテッド

という概念に基づいた介入が求められるのは、その子に何らかの困難が生じている場合です。なぜなら、特に学校においてギフトティッド児が大きな困難に遭遇する、ひいては不適応に陥る時、その原因をギフトティッド児の秀でた才能と切り離しては考えることができないからです。そして、ごく最近までの日本は、その困難や不適応の原因に秀でた才能が大いに関係するとは想像もできていなかった、障害の枠組みしかもち合わせていなかったと言ってよいでしょう。